螢

次第

いはふなる三ね月乃ごとく

龍のよしにはるの空　天地の

开きし恵久里乃天孫こやね

はゆはわ　春日の大府とは我

乎まわが梅もみはゆるり御母君

穢河志渡乃うつゞ春日と申所よ

しそゞなしなゝなるたまのひぬ世

汐をくめ前よ かへるも
なきふ濱川のくゝ塩海つけて
流蓋比ど我かうかそなきは
心なし去りし事さへおかの
里に帰り来く いりまゝ見なは
女のおさと此浦の蜑よきり
さらば浅うつ新の深きの海士

りてぬ かゝ世のためなり
はかり庵乃りくめをさりはて
参らせん いさとや揚
訛り望乃お終ふうや新住里と
ゆにかなと都の田舎乃ゐさゐ
不思議や雲りうへ人をりぬめ
めさきらん前まへもなしこの

あまなの里をはなれ乃里と
申て濃海士人乃住給ひし所
まれはみちなる志ろき波玉を
とりあへりしめてみそめしに
よはひあまりしき珠路と出て
新珠島と申は　梅の花大かたに
如なは何に中の所る　玉中に

秋途乃儀ましきのはじ方よわ
ホのかんまま禮拝が明し西方によ
よはひて西を向ひよろ賞罪人と
うりて西向不背玉とは
加羅の寶を何とそこの漢朝よわ
もわうし来なり　何の大臣
漢海公の御娘ハ唐高宗皇帝ほ

后にたゝせ給ふさゝ縁にて氏寺
なればとて興福寺へ三の宝を
渡さるゝ華原磬泗浜石面向
不背の珠二つの宝ハ京着し
明珠ハ此沖にて龍宮へとられ
しを大臣身をやつしこの
浦に下りたまひ賤しき女と

ちぎりをこめひとりの男子設
まうけしで此房前乃大臣是なり
ヽやあ我こそ房前の大臣よ
さては母なりし海士人や猶く
語りえん　ヽ然は母なやどゝを
彼江のしゝもち思ひ給ふよ
御ハ清方乃めぐへまゐるゝやよ

ひきあやは大臣乃
御子とむまれ給ひがなみしきし
藤乃つゞき給ひつる謡
るしるしの御殘まて母志られ
だのはと美亡心うしろすくなく
蒙さし世なくも海母ハ横ぬ
志渡の浦房前乃あまをきは

たゞ我あまとゝて玄蒙をうけ給
梅ハ林き海士北子志津のめ濃
りうに底とわかれ給ふやよし
う給ひとつも帰来うけずくずり
前々も月のひかる面露の画よ
あらばやと思へまゐ来りたわ
おもなきかし流なのまことや哉

まてなふで御目みのきそらん
ゆやくだくゆかやてらりそん
ゆりしせてはありずれきのぞ
何まうわふひ世飛ゑるにくれし
かゝぬ事だにゆきまさなくふ富
御目よのけらん　さかりはうと
乃なふて清めにのけらへし

其時海士人申やうもし此玉を
取えならば此御子を世継の
御位になしたまへと申しゝかは
子細あらしと領掌したまふ
扨ハ我子故にすてん命露程も
惜からしと千尋の縄を腰に
付きもしこの玉を取えたらは

此縄をうごかしなば其時人々
力を添へ引あげ給へと約束し
ひとつの利劔をぬきもつて
彼海底に飛入ければ空はひとつに雲
雲の波烟の波をしのぎつゝ
海漫々とわけ入て直下と見れども
そこもなくほとりもしらぬ海底に

そも神変はいさしらず取得ん
事は不定なりかくて龍宮に
いたりて宮中をみれば其高さ
三十丈の玉塔に彼玉をこめ置
香花をそなへ守護神には八龍並
居たり其外悪魚鰐の口のがれ
がたしや我命ぞかぎり是此

佛界に座せば法經よりの於て
提婆の達多ハ天王記莂を蒙ら
バ八歳乃龍女ハ南方無垢世界よ
生やうまれうくはなく轉讀
―たきの不應― 深達罪福相
遍照於十方 微妙淨法身具相
三十二 以八十種好 用莊嚴

法身 天人所戴仰龍神咸恭敬
あらありがたきの法經やとて
經の德用りうく 天龍八部
人與非人皆遙見彼龍女成佛
ざうざう讚歎志渡ると号し
毎年八講說音乃勤り佛法
繁昌乃靈地となるも此まさと

りきたらり風